

---

# ラヴィング-マグダラ-

むぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラヴィング・マグダラ -

### 【Nコード】

N7412X

### 【作者名】

むぎ

### 【あらすじ】

「ミリアを殺した世界を、壊したいんだ」  
妹を殺された復讐のため、世界を壊そうと計画したハイン・マグダラス。軍人になり、トゥーシャを召喚するという目的のため、手段を選ばず昇進を重ねていく。戦闘中、ルームメイト、ジル・サイフアリスクとのやり取りから、気持ちに迷いが生じるが、部下であり元帥の孫、メイベル・アイリーンに一喝される。  
入隊から十年、トゥーシャを呼び出し、目的を果たそうとするハインの前に現れたのは……。

ラヴィング主人公レオンの兄、ハインの過去から現在の話。

2009年頃に書いたものです。手元では完結しています。  
pixivに掲載予定、自サイトに掲載済みです。

目の前で、女がうずくまっている。木の床に血が散っている。俺の体も、ナイフも血で濡れている。私のことが気に入らないなら刺せばいいと言われたので、俺は持っていたナイフで女の腹を刺した。女の夫が駆け寄ってくる。男は女の背に手をあてて、俺を見上げる。目は、見開いていた。男は立ち上がって俺の頬を殴った。体が壁に叩きつけられる。

「頭を冷やしなさい。ハイン」

男は俺に近付いてきて、ナイフを持った右手をつかんだ。俺は手を振り払う。

「刺せって言ったのはそっちだ」

「刺したことを怒ってるんじゃない」

笑ってしまった。

「じゃあ何に怒ってるんだよ」

女が咳込む。男は女の側へ戻っていく。腹を押さえた女と、目が合った。俺と数歳しか変わらない。髪の色も目の色も似ているが、血は繋がっていない。女が、俺の方へ這ってくる。

「寄るな」

俺は女にナイフを向けた。女は青白い顔で首をかしげる。「どうして？」刺した相手に近付くなんて、こいつ、馬鹿か。

「レオンにはお前が必要だが、俺には必要ない。だから寄るな」

女の目が開いて、細く、なった。女が近付いてくる。俺はナイフを振りかぶる。女の手が俺の背に回る。俺は女に抱きつかれた。女が笑ったのが聞こえた。

「やっときゅーってさせてくれた」

何を、言っているんだ。出血で頭がおかしくなったのか？ 女は俺から顔を離して、俺を見上げた。女は愉快そうに、笑っていた。

「家族は、呪縛なのよ。だからハインちゃんも逃げられないの。で

も私は、嫌じゃないわ」

女は体を離れた。

「謝らないからね。刺した分、ちゃんと命の重さを知りなさい」

女が離れていく。男が女の体を抱えて、部屋から出て行く。俺はナイフを床に置いた。部屋のすみで、レオンがうずくまっていた。青い目が怯えたように俺を見ていた。

国が休戦して半年がたった。復興の折、スラムを解体するということで、俺とレオンは国際ボランティア団体に勤める夫婦に引き取られることになった。レオンには両親が必要だと思ったし、俺はすぐに家を出て行くつもりだったので、申し出を受けた。レオンはしばらくして義理の両親と打ち解けたようだが、俺はそこまで大人になれなかった。義理の両親を肉親として認めるつもりはなかった。そろそろ出て行くこうと思つた矢先に、これだ。けれど、俺を抱きしめた女の笑いは、狂気じみていた。この日から、俺は義理の両親を、俺を殴った男と、家族は呪縛だと言つた女を、両親として認めてもいいと、思うようになった。

庭の鉄柵の向こう、黄色い花畑の上を夜光蝶が飛んでいる。隣で、レオンが膝を抱えて座っている。目の前には石碑がある。ここへ来た時、事情を知つた夫婦が建てたものだ。本当の墓は、スラムにある。けれどそのスラムは、もうない。

「ここを出ていく」

レオンがこちらを向く。顔は俺によく似ているのに、俺とはまったく違う。レオンは頷いた。

「どこに行くの？」

「軍人になる」

レオンの薄い青色の目が開く。

「どうして？ 嫌いじゃなかったの？」

「嫌いだ」

「じゃあ何で？ あいつらお姉ちゃんを殺したのに」

もう、多分、俺はこうしないと生きていけないのだ。

「ミリアを殺した世界を、壊したいんだ」

気付くと、笑っていた。レオンの目が、俺があの子を刺した時のように震えた。

「どういうこと？ 何もかも嫌いだったってこと？」

俺のことが嫌いなのかと、昔よくレオンに聞かれたことを思い出した。俺はレオンの頭を撫でた。

「お前は好きだ。ミリアも、好きだ」

俺とミリアには本当の両親の記憶があるが、レオンには多分ない。血の繋がった両親に人身売買されて、奇跡的にスラムまで逃げられたのが丁度十年前だ。俺は九歳、ミリアは八歳、レオンは二歳だった。今思うと、そのまま誰かに買われて奴隷にでもなっていた方が幸せだったかもしれない。

「お前を愛してるし、ミリアのことも愛してる」

レオンにはあまり辛い思いをさせたくないと思って過ごしてきたが、逆に気を使わせてしまったらしい。レオンは俺を見て、うつむいた。

「ハインの好きは、よく分からない」

俺は笑って、レオンの頭から手を離れた。

「俺もよく分からない」

ミリアにしたことは、後悔していない。けれどミリアを女性として愛していたかという点、違う気がする。分かるのは、レオンより、助け合う時間の長かったミリアの方を強く愛していたということだけだ。ああ、そうか。それでレオンは嫌いなのかと俺に何度も尋ねたのか。俺は、レオンを抱きしめた。

「何？ ハイン、気持ち悪い」

すぐに振りほどかれた。俺は、笑った。

「お前は幸せになれるよ」

青い目が俺を見た。俺より青が薄く、ミリアの目の色に似ている。

「ハインは幸せじゃないの？」

喉がつまった。答えられない。世界を壊すということは、レオンも殺すということだ。結局、俺は生きているレオンより、死んでしまったミリアを取るらしい。俺は石碑を見た。ミリアは、死んでしまった。けれど俺は、この世界で一番、ミリアを愛している。

この国は、小国ながら軍事力がある。長年、隣国と戦争で渡り合っ  
てこられたのもそのおかげだ。けれどその軍事力を手に入れるた  
め、隣国は何度も戦争を仕掛けてくるのだ。休戦していても兵士は  
採用される。けれど、そこからではたいした昇進は望めない。俺は、  
上に行かなくてはならない。

「フォレンティア大将のお気に入りって、君？」

入隊式が終わって、寮に移動しようと廊下を歩いている時、話し  
かけられた。

「あ、ジル・サイファリスク。よろしく」

金髪で毛先の跳ねた男は、笑顔で手を差し出してきた。俺は何も  
しなかった。ジルと名乗った男は頬を膨らませる。

「そんなんじゃこの先辛いぞ」

何だこいつは。面倒臭い。

「名前教えてよ、名前」

ジルは俺の前に立ちふさがる。俺は足を止めて、ジルを避けて歩  
いた。

「おい、放っておけよ。そいつだろ？ 裏口入隊したやつ」

「じゃなきゃスラム育ちの奴がここにいる訳ないしな。一体どんな  
手を使ったのやら」

横を歩いていた同期の男二人が、言った。同期は俺を入れて全部  
で十人だ。今年は人数を絞ったらしい。どこから噂が流れたのか知  
らないが、耳が早い。

「別に俺はそういうつもりで言ったんじゃない、ただ同室だから  
仲良くしようと思って」

ジルは俺の横についてくる。こいつが同室なのか。変に嫌がらせされるのも嫌だが、絡まれるのも面倒臭くて嫌だ。

「名前だけでもいいから教えてよ。俺、同室なのに知らないっておかしいだろ」

面倒臭い。名前なんか知らなくても生きていけるだろう。

「お高くとまってやんのな。スラム育ちの癖に」

「俺らとは口も利かないってか。後ろ盾がある奴は違うね」

「だから俺はそういうつもりじゃなくて」

ジルは叫ぶ。

「ハイン・マグダラス」

ジルが俺を見たのが横目で分かった。

「ごめん、本当にごめん、聞こえなかったからもう一回」

何なんだ、こいつは。俺は歩調を速めた。

「だからごめんって、もう一回、もう一回だけ、今度は絶対聞き逃さないから」

ジルが後をついてくる音が聞こえる。同期に限らず、昇進を阻むものは全員敵だ。なのに何でこいつは俺と仲良くなるうとしているんだ。俺はため息をついた。先が思いやられる。

絶叫した後、ミリアは静かになった。濡れた頬が、夕陽で橙色になつていた。俺はミリアから体を離す。ミリアの口から、笑い声が聞こえる。目を見開いて、ミリアが笑っている。ミリアが上体を起こす。微笑んでいる。ミリアの細い指が、俺の首に触れる。

「ハイン。痛い」

指が、しまる。息を吸う音で、目が、覚めた。夢だった。体が弛緩する。ベッドの外を見ると、ジルが椅子に座っていた。目が虚ろだが、眠ってはいないようだ。ジルの緑色の目が、こちらを見て、目が合ってしまった。

「あれ、ごめん、起こした？」

狸寝入りを決めこみたかったが、もう遅い。俺は寝返りを打って



壁の方を向いた。

「せつかく起きたんだったら、ちよつと話そうよ。というか、話していい？」

入隊して一週間がたったが、こいつの態度は相変わらずだ。昼間の訓練で疲れているので、少しでも眠りたい。

「ちよつと、夢見ちゃって。って聞いてないだろ。まあ聞いてなくても話すけど。俺さ、恋人というか好きな人がいてさ」

「うるさい。寝る」

「ええ、何でだよ。せつかなんだから最後まで聞いてよ」

何でこいつの色恋話に貴重な睡眠時間を割かなくてはいけないのだ。

「すぐ終わるからさ。で、その子、俺の目の前で撃たれて、病院に運んだんだけど、もう駄目だって言われて、目の前で死んじゃったんだ。その夢で、目が覚めちゃったって訳」

家族や恋人を亡くしたという話は大して珍しくもない。俺もこいつも、その内の一人というだけだ。

「恨み言でも言われたのか」

「彼女に？ まさか。そういう人じゃないよ。恨んでる暇があったら働けて言われる。だから軍人になったんだ。もう死なせないために。って何か恥ずかしいな」

「軍人を恨まないのか」

「俺？ 別に恨んでもいいけど、いや、でもやっぱりそういうの俺っぽくないし。ハインは何で軍人になったの？」

俺は答えなかった。ジルが椅子から立ち上がる音がした。

「まあいいや。いつか教えてよ。付き合ってくれてありがとう」  
ベッドが揺れた。ジルが二段ベッドの梯子を上っていく。

「ハインも、叶うといいね。軍人になった理由」

上から、声が聞こえた。

「お前、いつか死ぬぞ」

ベッドに倒れこむ音が聞こえた。

「覚悟はできてる」

穏やかな声だった。少しすると、寝息が聞こえてきた。勝手に話しかけておいて、寝るのはやたらと早い。俺は寝返りを打った。部屋は月明かりで薄暗い。俺はこの男の明るさに、酷く苛立った。

入隊して三年目の夏、辞令が出た。あからさますぎて笑ってしまった。休戦してから反政府団体の活動が激しくなって、殉職した軍曹のポストが空いていたのだ。俺もその時現地にいたが、人間はつくづく争いごとが好き生き物だと思う。

俺は約束を入れて、上階へ続くエレベータに乗った。こんなスラム育ちの人間を昇進させる人間なんて、一人しかない。上に行けるのは願ってもないことだが、身边が大変なことになりそうだ。硝子張りのエレベータから、遠ざかっていく地上を見た。ここは、黒い要塞だ。上へ行けば行く程、望みが叶う。めでたく昇進したので、部屋も変わるのだろうか。やっとあの騒がしい奴から離れられる。

涼しい機械音が響いた。俺はエレベータを降りた。長い廊下を歩いて、扉の前に立っている兵士に声をかけた。

「十四時からお約束させていただいている、ハイン・マグダラスです」

兵士は俺を見て、扉をノックした。

「フォレンティア大将、マグダラス殿がお見えになりました」

『ああ、もうそんな時間か。入れ』

声が聞こえた。兵士が扉を開けた。

「失礼致します」

俺は部屋に入って、扉を閉めた。机の向こうに、ベルガ・フォレンティア大将が座っていた。それよりも、なぜか机の前に軍服を着た女が立っている。黒い髪を後ろで一つにまとめた、若い女だった。「すまないなマグダラス。前の話が長引いていな」

「いいえ、それなら外でお待ちします」

「お構いなく。もう済みましたので。お時間を取らせてしまって申

し訳ありません」

女は大将と、俺を見た。

「お前は初めてだったか、マグダラス。メイベル・アイリーン、元帥のお孫さんだ」

ああ、こいつが噂に聞いていた元帥の孫、か。まさか女だったとは。

「申し遅れました。ハイン・マグダラスです」

女だったら、こいつと結婚すれば軍での将来が約束されるのではないか？ そう考える輩も多そうだ。まあ現実はその甘いものではない。

「マグダラス軍曹ですね。昇進おめでとうございます」

女はにこやかに笑った。嫌味か？

「では、また何かありましたらお伺い致します。それでは、失礼致します」

女は扉の前でお辞儀をして、部屋を出ていった。

「待たせたな、マグダラス」「いいえ」

俺は大将が座っている机の前に立つ。

「この度は、私を軍曹に推薦して下さったと伺い、お礼に参りました。心より感謝申し上げます」

感謝しているのは本当だ。このまま俺を昇進させてくれればいい。

「そんなにかしこまるな。今はお前のような奴が上へいくべきだ。何事にも貪欲な奴がな」

大将とは、スラムで軍人の手伝いをしていた時に会った。休戦間際、どういう訳だか知らないがあのあたりを訪れたのだ。兵士の真似事をしていた俺を見て、大将はなぜか俺を気に入ったようだった。そのまま軍人になれ、できる限り助力しようと言われた。スラム育ちの子供風情が軍に入隊できたのは、この男の力に他ならないし、今回だってそうだ。

「本当に、感謝しています」

「最初はメイベル・アイリーンを昇進させるつもりだったのだが、

断られてな。昇進を蹴る代わりに、要望を聞いてくれと言われた」

あの女、地位に興味はないのか。というか、辞令をもみ消せる程、力があるのか？

「要望とは何です」

「あれが近いうち、お前の下につく」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。自分から俺の部下になりたいと言ったということか？ 元帥の孫が？ 何を考えてるんだ。俺の下につく意味がまったく分からない。

「上手くいけば大出世のチャンスだぞ。機を逃すな」

大将は笑った。「ご冗談を」目立ちすぎたのか？ 直々に監視されるということだろうか。まあ考えても仕方がない。誰が下につくうと、俺の目的は一つだけだ。

扉がノックされた。『フォレンティア大将、デビス軍曹がお見えです』

「では私はこれで。今回の件、本当に感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します」

「今後ともか。抜け目がないな。考えておこう」

俺は一礼した。扉の前まで来て、大将に呼び止められた。

「マグダラス、髪が長いな。部下への示しも考えて短くしておけ」

「かしこまりました」

俺は部屋を出た。入れ違いに軍曹と目が合った。俺は目礼した。いずれもつと上り詰めてやる。そのために、今ここにいるのだから。

エレベータを降りると、男が三人立っていた。同期二人と、俺より少し年上の男だ。早速来たか。相変わらず耳が早い。

「よう軍曹。やっぱり育ちのいい奴は違うな」

「現地で軍曹を殺したの、お前じゃないのか？ 自作自演ってやつ」

「お前、実は大将の慰め役なんじゃないのか」

一瞬、意味が分からなかった。久しぶりに吹き出した。「何笑ってやがるんだ」確かにここにはほぼ男しかいないから、そういう話

はたまに聞くが、まさか自分が言われる日が来るとは。

「いや、おかしくてつい」

「何なんだよお前、何でお前が昇進するんだ。どんな手を使ったんだ、言え」

年上の男が叫んだ。

「こんなことをしている暇があるなら、上に媚びを売る練習でもしたらどうですか」

「お前、やっぱり大将に取り入って」

「取り入ったら、何だ？　ここは遊び場じゃない、仕事場だ。選ばれたら勝ち、そういう所だ」

「偉そうに、スラムのガキが」

胸倉をつかまれる。俺は、男の頬を殴った。男の体が地面を滑る。「てめえ、やったな」残りの二人が身構える。

「問題起こしてただで済むと思ってるのか」

「先に手を出したのはそっちだ。言いつけたければ勝手にしろよ。スラムのガキにやられましたってな」

男達が舌打ちする。「この野郎」一人がこちらへ向けて腕を振り上げる。腕を避けて、男のみぞおちを蹴り上げた。男は呻いて、地面に倒れた。

「お前、本気で人を殺したいと思ったことあるか？」

俺はもう一人の男に近付いた。男が後ずさりする。

「何だよ今更、ふざけるな」

「逃げたければ、逃げろよ」

「畜生」

男は叫んで、軍服の内側から銃を取り出した。俺は走った。男が何か叫ぶ。俺は男の手をねじり上げて、みぞおちを殴った。男の体から力がなくなっていくって、ゆっくりと地面に崩れ落ちた。銃が男の側に落ちていた。

最初に殴った男が、地面から顔を上げていた。男は血走った目で俺を見上げていた。男の顔を蹴り飛ばすと、男は地面に倒れて、動

かなくなつた。

「お前ら全員、死ねよ」

誰も答えない。俺は寮の方へ歩き出した。

部屋の扉を開けると、膨らませた紙袋を割つたような音がした。

「ハイン、昇進おめでとう」

ジルが紙袋を持って笑顔で立っていた。俺はジルを避けて部屋に入った。

「あ、何だよ、冷たいの。念願の階級付きなんだから、もっと喜ばないと」

「うるさい。近所迷惑だ」

「ハインにも近所迷惑とかあるんだ」

ジルが俺の後をついてくる。

「あれ、喧嘩したの？」

ジルが俺の右手をのぞきこんでいた。確かに、手の甲が赤くなっていた。

「もしかしてあいつら？　いつもの二人？　あいつらやたら情報早いからな。なんて、まさかね」

ジルは笑う。

「馬鹿がもう一匹増えて、三人だ」

ジルは黙って、吹き出した。

「本当にそうなんだ。何考えてるんだろ」

「納得いかないからだろ」

「何で？」

「誰が見たって、今回ののは異様だ」

ジルはうなりながら自分の席に座った。

「俺はそんなに疑問感じてないけど。軍曹が負傷した時、少しだけハインが指揮とつただろ、勝手にだけど。ああいうのが効いてきたんじゃないの？」

「そついうので普通昇進はしない」

今回のことは本当に大将の独断だったのだろう。入隊してまだ三年目だ。こんなに早く昇進しては、軍の層の薄さをアピールしているようなものだ。

「結局、嬉しいの？ 嬉しくないの？」

緑の目が俺を見上げていた。

「昇進するのは願ってもないことだ」

「じゃあ喜ばいいよ。難しく考えないでさ。お祝いにとっておきのもの持ってきたから、ちょっと待ってて」

ジルは立ち上がった、部屋の奥へ消えていった。全員が全員、こいつのようだったら楽なのに。ジルがトレイを持って戻ってくる。

「じゃじゃん。お祝いのケーキです」

ジルはトレイを机の上に置いた。トレイの上には白いクリームの三角ケーキが一つと、銀のフォーク、ポット、ティーカップが乗っていた。

「お前、こんなものどこから？」

「食堂からくすねてきた。ずるいよな上層部ばかり。国民の生活も考えろっての」

ジルは椅子に座ってカップに紅茶を注いでいた。既に準備していたらしい。俺は椅子に座った。

「という訳でケーキは一つしかないから、ハイン食べていいよ。俺のことは気にせずに」

俺はジルからカップを受け取った。

「久しぶりだなあ、こうやってお茶するの。じゃあハイン、改めて昇進おめでとう。乾杯、って、お酒もくすねてくれればよかったなあ。今更だけど」

俺は紅茶を飲んだ。今まで飲んだお茶の中で、一番美味しかった。

「お前も半分食べろ」

俺はフォークでケーキを半分に切った。

「何で？ 甘い物駄目だった？」

「ケーキなんて食べたことない」

「じゃあ尚更全部食べなよ」

「俺だけに責任取らせるつもりか」

ジルは笑った。

「そうだね。それなら、食べるよ」

フォークが一つしかないの、俺は先にケーキを食べた。

「どう？」

「すごく甘い」

「いや、もっと美味しいとか不味いとかさ」

「嫌いではない」

まさか自分がケーキを食べる日が来るとは思わなかった。ケーキなんて、裕福な家の人間が食べるものだ。幸せに味があるなら、こんな感じだろうと思った。とても甘くて、牛乳のような懐かしい味がした。俺はケーキを半分食べて、ジルにフォークを渡した。

「うん、うまいうまい」

俺は紅茶を飲んだ。ケーキと紅茶という組み合わせの意味が分かった気がした。

「元帥の孫が俺の下につくらしい」

ジルがケーキを頬張りながらこちらを見る。

「何で？ 孫って、あの都市伝説みたいな孫のことだよな？」

「さつき会った。女だった」

「え、嘘、可愛かった？」

「お前の好みなんて知るか」

ジルは頬を膨らませる。

「元帥の孫が部下ねえ。すごいね。でもさ、俺は本当に実力だと思ってるよ。だってハイン冷たいもん」

意味が分からない。俺は紅茶を飲んだ。

「軍曹が負傷した時も見限るの早かったし。まあ、あの時は結果的に正解だったけど。他の人と雰囲気が違うっていうか、殺すのにためらいがないっていうか」

ジルは皿の上にフォークを置いた。ケーキはなくなっていた。



「ハインが軍人になった理由って、何？」

ジルは笑っていなかった。こいつは時々こういう顔をする。俺は紅茶のカップを机の上へ置いた。ここにいる限り、誰にも話すつもりはない。ジルは頬を膨らませた。

「ちえ。今日なら話してくれると思ったのに。まだ駄目かあ」

「俺の理由なんてどうでもいいだろ」

「だって隠すから、気になる」

「別に隠してない。言わないだけだ」

「それが隠してるっていうの」

ジルは紅茶を一気飲みした。俺は世界を壊すために、動くだけだ。

辞令が出た数日後、俺は部屋を移動した。同室はカイザー・デイス軍曹、大将の部屋で入れ違いになった男だ。当然俺より年は上で、髪を短く刈り上げた、いかにも軍人といういでたちをしている。部屋は今までの二人部屋とほとんど変わらなかった。少し広くなった程度か。荷物を運び終えて荷解きをしていると、軍曹が戻ってきた。

「本日からお世話になります。ハイン・マグダラスです。よろしく  
お願い致します」

俺は右手を差し出した。軍曹は動かず、俺を睨んでいる。完全に敵対するつもりか。今まで同室がジルのような奴だったことの方が珍しいのだから、当然か。俺は手を下げる。

「貴様、大将に取り入って昇進したというのは本当か」

この建物には、面倒臭い輩しかいないらしい。

「取り入ったつもりはありませんが、そう思われるならご自由にどうぞ」

「同僚を負傷させたというのは本当か」

あいつら、プライドを捨てて言ったのか。口元が笑ってしまった。  
「そうですね。正当防衛です」

軍曹の手が動いた。俺は顔の前で拳を受け止めた。軍曹は力を緩

めない。俺は止めた拳を払い落とした。

「せいぜい上に尻尾でも振ってることだな」

「ええ。言われなくともそうします」

軍曹は俺を睨んでいる。

「貴様、プライドはないのか。何を考えている？」

「別に、ただ出世したいだけです」

「汚い手を使って出世しても、いつか自分に返ってくるぞ」

「その時はその時です。むしろ綺麗に出世できる方法があるなら、教えていただきたいですね」

「貴様、人を怒らせるのがよっぽど得意らしいな」

「褒め言葉ですか」

軍曹が舌打ちする。また殴りにくるかと思ったら、部屋の扉が勢いよく開いた。

「あ、ハイン、いたいた」

ジルが扉から顔をのぞかせる。

「部屋に入る時はノックくらいしろ」

軍曹と言葉が、被った。これは気まずい。

「あ、ごめん。今度は気を付ける。様子見に來ただけだから。この人が同室？」

ジルは軍曹を見る。軍曹は俺を見る。

「貴様の友人か？」

「前、同室だっただけです」

「あ、酷いな。同期で友達だろ。そんなんじゃ友達なくすぞ」

「お前と友達になった覚えはない」

「貴様、友人は大切にしないと後悔するぞ」

何なんだ。やかましいのが二人に増えた。頭が痛い。

「荷解き手伝うよ。ついでに怪しい物がないか荷物検査します」

「何様だ。帰れ」

「あ、さては見られたらまずい物入ってるな」

「入ってない。お前と一緒にするな」

ジルは部屋に入ってきて、荷物をあさり始めた。荷物といっても、封の開いた箱一つしかない。

「あ、何これ、彼女から？」

ジルは白い封筒を取り出した。

「弟からだ」

最近、レオンから手紙が来た。ちゃんと学校へ行って、毎日楽しく過ごしているらしい。ジルは目を丸くした。

「弟とかいたんだ。想像できない」

「別に想像しなくていい」

「弟いくつ？」

今俺は二十二歳で、レオンとは七つ違いだから、十五歳か。成長期だから、最後に会った時と様変わりしているだろう。

「十五」

「へえ。離れてるね。というか、ハイン彼女いないの？」

「何でお前に話さないといけない？」

「あ、いるんだ」

「勝手に予想するな」

「分かった。片思いなんだ？ 格好いいのに態度が怖いから駄目なんだよ」

余計なお世話だ。と思つたら、頭に激痛が走った。軍曹が歩いていつて、ジルの頭を殴っていた。

「暴力反対」

ジルが叫ぶ。

「貴様ら、ここは俺の部屋でもあるんだ。騒ぐのもいい加減にしろ」俺はため息をついた。前にもこんなことがあったような気がした。

背の高い本棚に、本が隙間なく詰まっている。あたり一面、どこを見ても同じような光景が広がる。思い思いに本を読んでいる軍人達の姿が見える。紙の匂いは、好きだ。軍の図書館は広い。昇進して閲覧できる本が増えたので試しに来てみたが、特にめばしいもの

はなかった。カタリナとトウーシャのことをもつと詳しく知らなくてはいけない。

読み書きは軍人の手伝いをしている時に頼み込んで教えてもらった。付け焼刃にしては我ながらよく読んだり書けたりしていると思う。そういえば、レオンも字を書けるようになったということだ。この間の手紙に、いつ帰ってくるのかと書いてあったが、帰るつもりはない。レオンが幸せにしているなら、それでいい。けれど俺は世界を壊そうとしている。自分でも矛盾していると思う。

靴音がした。俺は振り向いた。

「失礼します、マグダラス軍曹」

軍服を着た黒髪の若い女が立っていた。女がこちらへ歩いてくる。「何の用ですか」

「正式にマグダラス軍曹の部下になることが決まりましたので、ご挨拶に参りました。こちらにいらっしゃると伺ったので。追い回してしまつて申し訳ありません」

その割に女は笑顔だ。

「会議室を取りましたので、そちらで少しよろしいですか」

何を考えている？ 話をしようという訳か。丁度いい。

「分かりました」

「部下に敬語はおかしいですよ」

調子が狂う。俺は女の後について少人数用の会議室に入った。硝子窓の向こうは空が青かった。

「お茶も出ませんが、どうぞ」

椅子を勧められる。俺は上座に座った。女は長机を挟んで俺の向かいに座る。

「改めまして、メイベル・アイリーンです。本日付けでマグダラス軍曹の部隊へ配属されました。以後、よろしくお願い致します」

メイベル・アイリーンはまったく邪気のない顔で笑った。

「アイリーン元帥の孫だろう」

「そういう呼び名もありますね」

メイベルは笑顔を崩さない。

「単刀直入に聞こう。何を考えている」

微笑んだ紫の瞳が、俺を見る。

「何も」

「嘘をつくな」

メイベルはあごに手をあてて、上を見る。

「そうですね、あえて言うなら、面白そうだからですかね」

「俺を監視するのがか？」

メイベルは俺を見て、思い切り吹き出した。

「何がおかしい」

「いえ、すみません。軍曹もまわりの方も勘違いされているようですけど、私は別に監視役でも何でもありませんよ」

「じゃあなぜわざわざ俺の下についた」

「さっきも言いましたけど、面白そうだからです」

「意味が分からない」

メイベルは微笑んだ。

「元帥は孫馬鹿ではないので、身内だからとか、そうでないとかは関係ないんですよ。ここへ来てから一度もお会いしてませんし。まわりの方はそうは思っていないようですけど。だからちよつとくらのわがままなら通るんですよ。便利ですね」

「それで、わがままの通る元帥の孫がなぜ俺の下に来た」

「だから面白そうだからだって言ってるじゃないですか。しつこいですね。しつこい男は嫌われますよ」

メイベルは微笑んでいる。今のは暴言か？

「今この建物の中で一番面白いのはあなたの側です。私を元帥の差し金と思うのならご自由にどうぞ。まあ本当にそうだったとしても、あなたが気にするとは思えませんけど」

よく分かっている。この女が監視役だったとしても、俺の目的は一つだけ、今より慎重に進めるだけだ。

「お前、この世界が好きか？」

メイベルは真顔で俺を見る。

「好きですよ」

「俺が世界を壊す気だと言ったら、止めるか？」

紫色の目が俺を見て、笑う。

「別に止めませんよ。できるかどうかやってみせて下さい」

俺は、笑っていた。

「分かった。信用する。お前に話すが、最初で最後だ」

「そうですか。これで私が差し金だったら大失敗ですね」

「いい、俺の勘は絶対だ」

「世の中に絶対はないんですよ」

「手厳しいな」

俺は立ち上がった。メイベルの側まで歩いていく。

「言い忘れていた。ハイン・マグダラスだ」

俺は右手を差し出した。

「髪が短くなりましたね」

「大将に切れと言われたのでな」

「そっちの方が、好きです」

メイベルは立ち上がる。

「これからよろしくお願い致します。軍曹」

メイベルは俺の手を握った。

仰ぎ見ると、木の葉の間から太陽が見えた。空はよく晴れていて、吹きぬけた風が汗を冷やしていく。

首都で反政府団体が破壊活動を行っているということで、出勤させられた。街の中は鎮圧を終えたが、残党が森に逃げこんだ。森は視界が悪いから面倒だ。今回指揮を執っているのはデビース軍曹で、俺は経験不足から一般兵と同じ扱いだ。メイベル、ジルも部隊に入っている。殺すことにもう抵抗はない。慣れとは思わしいと思う。時々、自分の目的を忘れそうになる。

葉が揺れる音がした。俺は息を止めた。殺される前に、殺す。木

陰から姿勢を低くしたジルが出てきて、俺は力を抜いた。「音を立  
てるな」小声で言った。「ごめん」ジルは小声で言っ、俺の側の  
木にもたれかかった。

「ハイン、何人殺した？」

「集中してろ。死ぬぞ」

「もう殺すの慣れちゃった？」

俺はジルの横目で見た。

「死にたければ一人で死ぬ」

「厳しいなあ、相変わらず。俺、やっぱり恨んだり殺したりするの  
向いてない気がする」

風が吹いた。振り返る。ジルの五メートル程後方に、銃を構えた  
男が立っていた。体術で気絶させるには間に合わない。俺は銃を撃  
った。銃声が響いて、男が倒れる。俺は舌打ちした。一度この場を  
離れなければ。ジルが後ろを振り返っていた。

「離れるぞ」

ジルは動かない。俺はもう一度舌打ちした。姿勢を低くしたまま  
動き出す。うなじに、硬いものが当たった。硬くて、冷たい。俺は  
ゆっくりと振り返る。喉に、銃口が押し当てられた。

「さつき、殺したりするの向いてないって言ってなかったか」

ジルの目は、殺す気もないのに俺に銃を向けた男とは、違ってい  
た。指は引き金にかかっている。

「ごめんね、ハイン。ハインに恨みは、ないんだけど」

ジルは困ったように微笑んでいた。

「彼女、スラムの少年兵に撃たれたんだ。本当の彼女はそんなこと  
言わないけど、夢の中で、言っんだ。殺してくれって」

ジルの緑色の目は、揺れない。

「俺を殺して、お前は救われるのか？」

風が吹いて、木の葉が音を立てた。大きな音が聞こえた。ジルは、  
微笑んだ。

「嘘、冗談。ちょっとした昔話だよ。俺、ハインのこと、好きだも

ん」

大きな音が、連続で、した。ジルは銃を下げる。そのまま、地面に倒れこんだ。ジルの後方で、うつぶせに倒れた男がこちらに銃を向けていた。風が吹いた。俺は男へ向けて、銃を撃った。

日が沈んだ後の図書館は、長机の上に置かれたランプの明かりしかない。本を読むには暗い。誰もいない。俺は頬杖をついた。靴音が、した。俺の隣で止まる。

「何をしてる」

「何も」

女の声が言う。

「落ちこんでいるんですか？」

先の反政府団体鎮圧の任務は、兵士二十二名中、死亡者一名、負傷者十名と、この規模の作戦にしては被害が甚大だったと、上官が苦言を呈していた。もっとも、評価に響くのは俺ではなくて、指揮官だったデイビス軍曹だ。

「少し、迷った」

男を撃った後、気付いたら、俺のまわりには敵兵が何人も倒れていて、側にメイベルがいた。ジルも、倒れていた。

「何をですか」

ジルは、死んだ。俺は目を閉じた。

「俺は、合ってるのか？」

靴音がした。俺は目を開ける。メイベルが机に座って腕を組んでいた。

「らしくないですね。あなたの側にいれば面白いと思ったのに」  
ランプの炎が揺れる。

「軍曹はジル・サイファリスクじゃなくて、妹さんを一番愛してるんでしょう？　なら答えはおのずと決まってくるんじゃないですか」

俺は顔を伏せた。メイベルの言う通り、今も昔も、変わらず愛し



ているのはミリアだけだ。

「まあ人間ですから、悩むこともありますけどね。あなたがそういう風に悩むのは意外でしたけど」

俺は顔を上げた。メイベルは暗くなつた窓の外を見ていた。

「何でそんなに達観してるんだ？」

「色々あつたからですよ」

「いくつだ？」

「不躰ですね。教えませんよ」

「教えられない歳じゃないだろう」

「軍曹が教えてくれたら教えます」

俺は一瞬、考えた。二十を過ぎてから、どうも自分の歳が覚えられない。

「二十二だ」

メイベルは意外そうな声を上げた。

「若いんですね」

「老けて見えたか？」

メイベルは笑った。

「そういう訳じゃないです。私も同い年ですよ」

俺はメイベルを見た。

「じろじろ見ないで下さい。失礼ですね」

「若いな」

「軍曹も同じですよ。何言ってるんですか」

メイベルは机から降りた。

「後追い自殺とかしないで下さいね。面倒なんで」

「自殺はしない。死ぬのは、カタリナを呼び出した時だ」

メイベルは満面の笑みを見せた。

「それでこそ、軍曹です」

俺は本を閉じた。どうも暗いと思ったら、もう陽が落ちていた。夕方から本が読めなくなる図書館はどうかと思うが、その矛盾は好きだ。

入隊してから六年目、大尉になった。閲覧できるようになった本も増えたが、肝心のカタリナを召喚する呪文がまだ分らない。佐官クラスか、それ以上にならないといけないようだ。それでも駄目なら、外に探しに行くしかない。呪文が分かっても、カタリナを召喚するにはトゥーシャが必要な気がする。トゥーシャが絶滅してから六万年、カタリナは一度も召喚されていないから、多分現代人では駄目なのだ。更に昇進するにこしたことはない。

俺は本を持って席を立った。貸出手続は済ませてある。召喚の呪文は載っていないが、少しでも知識を頭に入れておきたい。暗がりの中に司書が一人だけいた。俺は図書館を出た。

靴音が響く。黒い窓硝子に廊下のランプと自分の姿が映っていた。図書館は寮から遠いので、この時間にここを通る人間はほとんどいない。通り道には会議室しかない。

俺は、足を止めた。来た道を振り返って、歩き出した。今しがた通りすぎた会議室の扉を開け放つ。暗い室内の床に、男が二人と、仰向けに口元を押さえつけられた、メイベルがいた。男達は俺を見て動かない。メイベルが、見開いた目で俺を見ている。

「部下に勝手に手を出すな」

男達が弾かれたように立ち上がる。歳は俺より若い。男の一人が何か言って、俺へ手を振りかぶる。俺は軍服の内側から銃を抜いた。男の喉に銃口をつきつける。男の動きが止まる。

「撃たれるか帰るかどっちかにしろ」

男は苦々しそくに顔を歪めて、後ずさりする。もう一人の男は俺の横を走り抜けて、外へ出ていった。銃を向けた男も背を向けて外

へ走り出す。靴音が遠ざかっていって、俺は銃をしまった。

「申し訳、ありません」

小さな声が聞こえて、振り返る。メイベルが床に座っていた。見た所、何かされる前だったようだ。

「何があつた？」

メイベルは目を伏せる。俺の方を見ない。

「大尉を探しに来たら、突然ここに連れこまれて、何で私が大尉の下についているのか聞かれました。大尉を失脚させる気はないかと言われて、ないと言ったら、力づくでということだ」

「何かされたのか？」

「いえ、それは、大丈夫です。本当に、申し訳ありません」

「あまり人気のないところを通るな」

メイベルは返事をして、もう一度謝った。俺は開きっぱなしの扉に手をかけた。

「俺はお前が裏切っても、したいようにするだけだ。だから自分の保身を優先しろ」

「私は私のしたいようにしただけです」

メイベルが顔を上げる。俺は笑った。

「それならいいが。メイベル、最後に頼れるのは自分だけだ」

メイベルは目を伏せた。

「寮まで送る」

メイベルは立ち上がって、小さな声で謝った。

入隊してから十年目の春、俺は大佐になった。戦場で味方の指揮官を事故に見せかけて殺すことにためらいはなかった。常に噂がついてまわったが、階級が上がるごとに表立って文句を言う輩はいなくなっていた。

ようやくカタリナを召喚する呪文を手に入れて、魔術師に試させたが、全員死んでしまった。やはりカタリナを召喚できるのはトウシャだけらしい。トウシャをここに呼び寄せなければならぬ。

隣国との休戦協定の期限が近付いていた。俺は会議で発言した。

「過去からトウーシャを転送し、軍事兵器とすることを提案します」  
円卓から失笑が漏れた。

「マグダラス大佐、物を言う時は一度考えてから言えと学校で教わらなかったのかね」

「仕方ない、大佐は我々とは育ちが違うのだよ」

笑い声が満ちる。俺の隣に座ったメイベルは、つまらなさそうにあさつての方向を見ていた。

「そんなに非現実的な案とは思いませんが。トウーシャの魔力は魔術師百人分に匹敵するといえます。自我を奪って魔力を増幅する装置に組み込めば、装置を作るコストを考えても、大砲よりずっと安上がりだと思いますが」

「しかしそれは、倫理的にどうなのかね」

俺は心の中で笑った。今更何が倫理だ。

「ご存知の通り、トウーシャは遅かれ早かれ絶滅する種族です。ここで自我を奪われるのも、過去で絶滅するのも、結果的には変わらないでしょう。むしろ生きているだけかもしれませんが」

円卓が静まり返る。

「しかし、我が国にそんな資金はない。君が転送に関する費用を全て負担するというのかね」

「まあ待て」

円卓の上座の方から声が上がる。大將が、俺を見た。

「そこまで言うなら、やらせてみたらどうだ」

この男は、どこまでも俺の都合のいいように動いてくれる。

「またですか、フォレンティア大將。あなたのマグダラス大佐への態度は下の者達からも疑問の声が上がっているのですよ」

「言いたい奴には言わせておけばいい。マグダラス、覚悟はあるのか」

「ええ、もちろん」

覚悟なら、ミリアが死んだ時からしている。ここでしくじる訳に

はいかない。

「なら、お前に任せよう。やれるだけやってみろ」

「フォレンティア大将、万が一の際は貴殿にも責任を取っていただけるのでしょうか」

「いいだろう。現場責任者はマグダラス大佐に一任する。総責任者は私だ。よろしいですね、元帥」

大将が円卓の上座を向く。坊主頭に白い口ひげを生やしたアイリン元帥が座っている。メイベルも、元帥を見ていた。

「好きにしろ」

円卓に囁きが溢れる。「まあ、それならば」「フォレンティア大将も責任を取って下さるようだし」「ここにいるほとんどの奴らが、俺と大将を邪魔だと思っている。この機会に降格しろということだろう。もっとも、しくじるつもりは毛頭ない。やっと巡ってきたチヤンスだ。絶対逃しはしない。」

「それでは、この案は成立でしょう」

俺は、誰にも分からないくらいに、笑った。思いが果たされる日は、近い。

風が吹くと、桜が雨のように降り注いできた。

「似合わないですね、大佐と桜」

俺は歩調を緩めた。見通す限り、ずっと桜の木が並んでいる。空は薄水色で、空気も暖かい。力を抜くと体が溶けそうな雰囲気も、嫌いではない。

「何でだ？俺は好きだぞ。桜」

「桜が綺麗すぎて、大佐の黒さが引き立つちゃいますよ」  
メイベルは風に流れる髪の毛を押さえる。

「よく言う。お前の方が黒いぞ」

「私は知り合いを殺したりしたことないです」

「そういう参謀が一番たちが悪い」

「失礼ですね。私はただ大佐の行く末を見守ってるだけです」

俺は口元を緩めた。

「性格悪いな」

「大佐に言われたくありません」

「成功させる。絶対にな」

「そうですね。成功してもらわないと、こんなへんぴな所まで来た意味がないですからね。というか、いつまでたっても自分で行動するのが好きですね。こんなの部下に任せてもいいのに」

「メイベル、最後に頼れるのは自分だけだ」

メイベルは俺を見上げて、微笑んだ。

「そうでしたね。で、何でここなんですか？ 桜は綺麗だからいいですけど」

「昔、スラムがあつた場所の近くだ」

メイベルは納得したように小さく声を漏らした。

トウーシャを過去から転送する装置を作るため、魔術師を本部のある首都へ召喚することになった。視察に訪れたのがここだったという訳だ。そのまま帰るのも何なので、たまたま見つけた桜並木を散歩してみようという気になった。

「前々から思ってたんですけど、大佐は妹さんを女性として好きだったんですか？」

メイベルは真顔だった。

「よく分からない」

今やるうとしていることは、もはや妄念に近いのかもしれない。

「でも、今も、愛している」

メイベルは何も言わなかった。メイベルを見ると、目をそらされた。

「いや、すみません。聞いたこっちが恥ずかしくなったので」

「何でだ」

「いや、らぶらぶだなと思って」

「やきもちか？」

メイベルは紫の目を丸くして、笑い出した。大爆笑している。ど

うやらつぽに入ったらしい。

「何でそんなに笑うんだ」

「いや、すみません。その答えは念頭になかったので。安心して下さい、好きじゃないです」

「そうか。それは残念だ」

俺は笑った。

「でも大佐、女性兵には大人気ですよ。軍内の抱かれない男ランキング五年連続一位ですし。性格こんななのに、やっぱり人は見た目ですかね」

「そんなランキングがあるのか。というか、俺は仮にも上官だぞ。容赦ないな」

「それは失礼しました。人としては尊敬していますよ」

メイベルは微笑んだ。こいつの見た目にだまされている奴もかなり多そうだ。

桜並木の終わりに、白い建物が見えた。建物に入っていく人影に、目を奪われた。

「メイベル、先に帰るなり待機するなりしていてくれ。用事ができた」

俺は白い建物へ歩き出した。

「はい、行つてらっしゃい。今度は何ですか」  
背後でメイベルの呆れた声が聞こえた。

硬いエナメル質の床に靴音がよく響いた。俺は足を止めた。音がしない。耳鳴りがする。廊下の片側一面、硝子張りの窓から陽が差しこんでいる。白い床に反射して、目がくらむ。

靴音が聞こえてくる。両手いっぱいに鮮やかな花束を抱えた赤毛の男が、俺の横を通りすぎる。男は俺と目を合わせなかった。靴音が遠ざかって、扉を開閉する音で消える。また音がしなくなった。俺は窓べりに手をかけた。

ジルに、似ていた。だから追いかけてしまったのだ。もちろん、

別人なのは分かっている。俺は看護婦を捕まえて、今の男のことを尋ねた。終戦間際に恋人が撃たれ植物状態になり、それからずっとここに通い続けているらしい。名前は、ジーク・フォンフィリア。俺はジークが入っていた病室の前で待った。扉が開いて、顔を伏せたジークが出てくる。花束はなくなっていた。ジークは俺を見ずに歩き出す。

「取引しないか」

ジークは足を止めて、振り返った。赤毛だが、跳ねた毛先もよく似ている。丁度、あの頃のジルと同じ年くらいだ。茶色い目が、冷ややかに俺を見る。

「俺ですか？」

「そうだ」

「何ですか、いきなり」

「今から言う条件をクリアできたら、お前の恋人の治療費を一生分出す」

茶色い目が細くなる。ジークは答えない。俺は床に視線を落としたり。明るくて、眩しい。

「話だけ、聞きます」

俺は視線を上げる。ジークが俺を見ていた。これは贖罪なのだろうか。考えてから、違うと思った。これは賭けだ。俺が合っているのか、間違っているのか、これで分かるはずだ。俺を止めるなら、止めてみる。そうしたらもう二度とこんなことはしないと誓う。俺も一緒に死ぬのう。

ジークは、俺の申し出を、受けた。

俺はベッドから上体を起こした。体中が痛い。部屋には誰もいない。眠り慣れた部屋ではなく、変哲もない宿屋の一室だ。俺は自分の手を見た。手を握って、開いた。体は痛い、死ななかった。我ながら強運だ。俺はベッドから出てカーテンを開けた。外は真っ暗だった。ポケットから懐中時計を出してみると、十時だった。扉が



開く音に振り返ると、メイベルが立っていた。

「やっと起きましたね」

「どれくらい寝ていた？」

「半日ですね。それより何かおごって下さい。大佐を運ぶのにどれだけ体力を使ったと思ってるんですか。重いつたらありやしない」

レオンと、ジークと、トゥーシャに会った。レオンは家を出てから会っていないから、実に十年ぶりだ。俺より背が高くなっていた。ジークは俺達の突然の来訪に戸惑っていた。こちらから連絡をとっていなかったのだから、当然だろう。けれど本当に邪魔をするつもりはなかった。トゥーシャの実力を自分で確かめてみたかっただけだ。

そのトゥーシャに、とうとう会うことができた。メイベルから話は聞いていたが、顔立ちの整った美しい女だった。懐かない猫のようだ。さすが魔術師百人分の力というだけあって、魔法の威力は桁違いだった。よく死ななかったと思う。

「聞いてませんね。裏切りますよ」

「それは困る。すまない」

「おごって下さい。あと呪文もかけまくったのでくたくたです。というか、増幅の手袋がなかったら、大佐多分死んでましたよ」

メイベルは真顔になっていた。増幅の手袋は、文字通り魔法の威力を増幅させる手袋だ。俺がトゥーシャの呪文をかき消したのは飛散の手袋で、裾の刺繍以外、見た目はほとんど変わらない。

「さすが、トゥーシャですね」

「そうだな。期待以上だ。アイネ、だったか」

「まあもういいんで、おごって下さい」

レオンはあの様子だとトゥーシャに惚れているのだろう。随分面倒な相手を好きになったものだ。

「聞いてませんね。通報しますよ」

「いや、悪かった。おごろう」

「クレープおごって下さい。特大のやつ」

「太るぞ」

「死にたいんですか？」

「いや、何でもない」

俺は暗い窓の外を見た。今確かに、ここにトゥーシャが存在している。

「面白くなってきたな」

「そうですね」

俺は猫のようなトゥーシャの姿を思い出して、窓のカーテンを閉めた。

執務室で報告書を眺めていると、机の上の通信機が鳴った。俺は午後の穏やかな空を見て、伸びをした。通信機を取り上げて耳に当てる。

「マグダラスだ」

『メイベルです。ジーク・フォンフィリアがトゥーシャを確保して到着しました』

俺は椅子の背にもたれて、立ち上がった。

『どうしますか？』

窓際まで歩いていく。下に、地上が見える。俺も随分高い所まで来たものだ。

『切りますよ』

「すまない」

俺は笑った。

「そうだな、とりあえずここまで連れて来てくれ」

メイベルは曖昧な返事をする。

『性犯罪だけはやめて下さいね。面倒なんで』

「それは気を付ける。いくつか聞きたいことがあるだけだ」

『分かりました。五分後には到着します』

俺は通信機を切った。窓硝子にもたれかかる。願いが、叶う。レオンも、ジルも、俺を止められなかった。世界は、俺を受け入れた。

ミリアが死んでから十年、ようやく世界が壊れる。俺は天井を仰いで、目を閉じた。愛する妹の名前を、呟いた。

扉がノックされた。『メイベルです』『入れ』メイベルと、トゥーシャを抱きかかえたジークが入ってくる。トゥーシャは目を閉じていて、足には足かせがかかっていた。

「本当に、連れて来るとは思わなかった」

ジークは茶色い目を細くする。

「約束が守られないなら、逃げます」

「約束は守る。治療費は一生分出そう」

俺はジークの目を見た。

「レオンを、裏切ったのか」

ジークは揺れない真っ直ぐな目をしていた。あの時の、俺の喉元へ銃を向けた時のジルと、同じだった。

「レオンより、彼女の方が大事ですから」

俺は笑った。

「そうだな。ではそのレオンの到着を待つとするか」

「始めないんですね？」

メイベルが意外そうな声を上げる。

「全員揃ってからの方が面白いだろう。それまでトゥーシャと話でもしている。そこへ置いていってくれ」

俺はソファを指した。ジークがトゥーシャをソファに下ろす。よく見ると、後ろ手にも手錠がかかっていた。

「レオンが着いたら知らせしてくれ。それまで待機だ」

「分かりました。手足は封印してあるので大丈夫だと思いますが、気を付けて下さい。あと、変な気を起こさないように」

「分かっている。何なら監視カメラで見えてくれても構わないぞ」  
「ではそうします。失礼します」

メイベルとジークが部屋を出ていく。静かに、なった。俺は机を挟んでトゥーシャの向かいの三人掛けソファに座った。アイネ、だったか。眠っている。睡眠導入剤を飲ませたのだろうか。俺はソフ

アの背もたれに沈みこんだ。アイネの目が、ゆっくり開いた。エメラルドの瞳がこちらを見る。目が見開かれて、鎖の音が聞こえた。  
「目が覚めたか。お姫様」

鎖の音が激しくなる。アイネがソファの上でもがいている。魔力封じの手錠だから、逃げられはしない。魔法の使えないトウーシャなど、ただの女だ。アイネはもがくのをやめた。無駄だと分かったのだろう。

「ジーク、仲間だったの？」

エメラルド色の瞳が、動揺している。前回戦った時とは別人のようだ。

「理解が早いな。仲間ではない。取引していただけだ」

「ここは？」

「軍の本部だ」

「私を兵器にするの？」

俺は笑った。

「いや。予定が変わった。レオンが来たら教える」

エメラルドの瞳が細くなる。

「レオンが来るかなんて、分からない」

「分かるよ。しらばっくれてるのか、本当に分からないのか、どっちだ？」

俺はソファを立った。アイネの側に歩いていく。

「レオンが好きか？」

アイネは怪訝な顔をする。俺はアイネの顔の横に手をついた。手がソファに沈みこむ。俺はアイネのあごをつかんで、唇で、唇を塞いだ。エメラルドの瞳が見開く。顔を離すと、白かったアイネの頬が赤くなっていた。俺は銀色の髪を分けて、アイネの耳元へ唇をあてた。

「待つて、何で、どうして」

アイネが叫ぶ。鎖が激しく音を立てる。俺はアイネのブラウスのボタンを外していく。アイネの白い肌は、わずかに赤い。胸元へ、

手を伸ばす。

「嫌、嫌だ、レオン」

アイネは叫んだ。俺は手を止める。アイネが、泣きそうな目をして俺を見ている。顔が真っ赤だった。俺は吹き出した。

「それが聞きたかった」

アイネの上からどいて、隣に座った。見開いたエメラルドの瞳が俺を見ている。アイネは、震えていた。

「可愛いな、アイネ」

銀色の髪を指ですくう。「触るな」アイネが叫ぶ。

「時間があればレオンからお前を奪って遊ぶのも楽しいが、今は止められてるからな。それとも、約束を破って本当に遊ぶか？」

アイネの頬に触れる。アイネが、震える。魔法が使えないと、本当にただの女なのか。

「お前もレオンも好きになるのが早いな」

「私のことはどうでもいいでしょう？ レオンが来たら何をするつもりなの」

「それはお楽しみだ」

アイネが真っ赤な顔でこちらを睨んでいる。俺は笑った。

「どうしても知りたいんなら、キスしろ。そうしたら教えてやる」

アイネは目を丸くする。唇が薄く開く。どうやら呆れられているらしい。

「どうして、好きでもない人とそういうことをしようと思うの？」

「お前のことは好きだ。アイネ」

「何言ってるの？」

「レオンのどこが好きなんだ？」

エメラルドの瞳が俺を睨みつける。

「だから、私のことはどうでもいいでしょう」

「レオンが来るまで暇だ。質問に答えろ」

「質問したいのは私の方。何で呼び寄せたの」

「妹のためだ」

「妹？」

アイネは小さな声で呟いた。

「あなたはレオンのお兄さんなんでしょう？　妹がいるの？」

「死んだ。今はいない」

アイネが俺を見ている。

「死者を生き返らせるのは、私達にだってできない」

俺は小さく声を漏らした。その方向は考えつかなかった。

「そういう選択肢もあったのか。まあ、それよりもっと簡単なことだ」

俺はソファにもたれて、天井を仰いだ。

「暇だな。少し眠る。通信機が鳴ったら起こしてくれ」

「起こす前に逃げる」

「そんな状態でどうやって逃げるんだ。レオンが来るまで大人しくしておけ」

俺は目を閉じた。

「膝枕してくれないか」

「変態なの？」

冷たい声が聞こえた。そうか、俺は意外とこの世界が好きだったらしい。笑って、真っ黒な世界で、思考を切った。

連続した高い電子音で目が覚めた。目覚まし時計かと思ったら、通信機だった。立ち上がると体が痛かった。いつも使っている机の側まで歩いていく。ソファを見ると、アイネがさっきと同じ体勢のまま、こちらを見ていた。俺は鳴り続ける通信機を取って、耳に当てた。

「マグダラスだ」

『メイベルです。弟さんが到着したようなので準備して下さい』

窓の外は真っ暗だった。

「随分遅かったな」

『そうですね。というかあれだけ手を出すなって言ったのに、何か

してましたね。痴呆症ですか」

「ちよつとちよつかいを出したただけだ。人の食べてるものが美味しそうに見えるのと同じだ。やきもちか？」

『では今さっきの大佐の映像を軍内に流しますね。高画質で』

「冗談だ。レオンを迎えにいつてやってくれ」

『分かりました。では後程』

俺は通信機を机の上に置いた。アイネを振り返る。

「やつと王子様の到着だ。来い、アイネ」

エメラルドの瞳が、俺を睨んでいた。

足元から浮かび上がる青白い光が、黒い部屋の中でレオンの法衣を浮き上がらせていた。レオンの後ろには大将と上層部の軍人、俺の後ろにはメイベルとジーク、右横には硝子ケースに入ったアイネがいる。

「俺の勝ちだ」

「違う。お前も俺も同罪だ」

レオンの声が反響する。俺は軍服の内側に手を入れる。

「知ってるよ、そんなことは。だから全員一緒に死ねばいい」

銃をレオンに向けた。歩いていつて、レオンの喉元へ銃口をあてた。硝子ケースの中のアイネを振り返る。

「アイネ、カタリナを呼べ」

エメラルドの瞳が開いた。

「どういうことだ、大佐」

大将が叫ぶ。俺は大将の方を振り向いて、微笑んだ。

「ありがとうございます、大将。あなたのおかげでトウーシャの召喚準備がスムーズに進んだ。軍事兵器の案を取り合ってくれたのはあなただけでしたからね」

「どういう、ことだ」

俺はレオンを見た。

「まだ分からないのか？ お前の所に大司教をやったのは、軍だ。」

軍がトゥーシャを連れ帰れば俺には手が出せない。そうなれば軍事兵器として使われる。けれどももし男がトゥーシャを連れ帰れば、俺がカタリナの寄り代として使うということだ」

本当は、軍の誰かがトゥーシャを連れ帰ったとしても、奪い返すのはそう難しくなかっただろう。けれど俺は最後に賭けた。ジルにも、レオンにも、創造主にさえも、勝った。

「お前、そういうことだったのか？ 軍に復讐するためにアイネを呼んだのか？」

レオンは叫んだ。俺は笑った。ミリアはジルでもなく、レオンでも、創造主でもない、俺を選んだ。

「軍じゃない。世界にだ」

「大佐、説明しろ」

大将が叫んだ。俺は振り返った。

「簡単に言えば、仇討ちです」

「誰のだ」

「妹のです」

「貴様、気が狂ったか」

俺は笑っていた。

「狂っているのはあんた達だ。戦争にかこつけて妹を強姦して殺した。休戦があと少し早ければ、ミリアは死なずにすんだのに」

叫び声が、響いて消えた。大将は銃を抜いた。俺へ銃口を向ける。

「あなたが撃つなら、俺は先に弟を撃ちますよ」

大将は動かない。俺は硝子ケースの方に振り向いた。

「さあアイネ、選べ。愛しい男が目の前で死ぬのを見るか、カタリナを召喚して全員道連れにするか。どちらにしろ、レオンは死んでしまうがな」

「呼ぶな。駄目だ。アイネ」

俺はレオンの喉に銃を押し当てた。大将の方を振り向く。俺に銃を向けている。

銃声がした。俺はレオンを大将の方へ突き飛ばしていた。レオン



の前を、黒い影が覆う。レオンと影は一緒に倒れて、レオンは弾かれたように起き上がった。

「お前、何で、そういうところだけ持つていくんだよ」

レオンの前に、ジークが倒れていた。

「俺は彼女が生き続けてくれれば、それでいいんだよ」

戦場で微笑みながら倒れた、ジルの姿がフラッシュバックした。

「裏切ったんなら最後まで裏切れよ、馬鹿」

俺はレオンの方へ歩いていく。レオンの胸倉をつかんで、左肩に銃口を押し当てる。薄い青色の目が見開いた。俺は引き金を、引いた。焦げた匂いと共に、レオンの体が落ちていく。

床に倒れたレオンの口に、銃口をねじこんだ。アイネがカタリナを呼ばないのなら、俺の手で殺すまでだ。

『無の古』

俺は硝子ケースの方を振り返った。やっと、その気になったか。

『一 全 素 源 生の彼方幾星霜』

大将ともう一人の軍人が硝子ケースへ銃を向ける。無駄だ。わざわざ割れるケースなど、誰が用意するものか。

『死せる魂繋ぎ止め 以って我が身に降り給え』

アイネはこちらを見て、微笑んだ。泣きそうな目をしていた。

『オルタナ』

光があつた。俺は目を覆った。硝子の弾ける音がして目を開けると、割れた硝子ケースの中に、アイネが立っていた。

「カタリナでは、ないのか？」

アイネは呪文の最後にカタリナとは言わなかった。アイネがこちらを向いて、微笑んだ。

「オルタナだ」

オルタナという呪文など、聞いたことがない。

「そうか。今の子等は私を知らないのだったな。創造主だ」

「創造主は二人いるということか？」

「そつだ。これはカタリナとの共同作品だ」

「なぜオルタナを呼んだんだ？」

俺は呟いていた。

「誰も死なせたくないからだ」

聞こえていたらしい。オルタナは言った。

「苦肉の策だ。トゥーシャにとつて、生き続ける苦しみより、死んでしまう悲しみの方が大きかったのだろう。どちらにしろ世界は壊れてしまうけれど」

俺はレオンの口から銃を外した。

「アイネ」

レオンが叫ぶ。

「トゥーシャには聞こえない。私はもう私だ」

俺はオルタナの側へ歩いていく。

「お前も世界を壊すのか？」

「この世界では誰も死なない」

雷が光ったように、目の前が点滅して見えた。

「お前の一番会いたい者に会わせてやろう」

オルタナは手を横へかざした。そこには、十年前と同じ、腹を刺され、腸を引きずり出された、ミリアがいた。左半身が腐り落ちている以外、何も変わっていない。歳も、とっていない。ミリアが近付いてくる。腐り落ちた手で、俺の頬に、触れる。

「久しぶりね。ハイン」

ミリアは半分しかない口で笑った。喉から、息をする音が聞こえる。

「どういう、ことだ」

オルタナは世界を壊す訳ではないのか？ ミリアの手が俺の腰におさまっていたナイフを抜く。

「それはつまり、こういうことね」

銀色の刃が、俺の腹に刺さった。刃が、抜けていく。赤い血が吹き出す。戦場で、何度も見た。けれど、とても綺麗な赤だった。膝から力が抜けて、体が床に倒れる。痛くて、冷たい。銃声が聞こえ

た。

「馬鹿ねえ。話を聞いていなかったの？」

悲鳴と、重いものが倒れる鈍い音がする。

「これから大切なのは、死なないようにすることではなくて、傷を負わないようにすることよ」

大将の叫び声が、聞こえる。

「痛みなんて、すぐに慣れるわ」

先程と同じ音と共に、対照的に軽い足音が聞こえてくる。

「あなたは何もしないの？」

「私は見守るように言われているわ」

ミリアはつまらなさそうに「ふうん」と言った。足音は俺から少し離れたところで止まった。

「レオン？ 大きくなったわね。あなたのことは許してあげる。まだ子供だったものね。ハインに撃たれたの？ 可哀想に。後でゆっくり話しましょう」

足音が、近付いてくる。痛みで意識が飛ばない。

「起きて、ハイン。気絶するなんてまだ早いわ」

胸倉を引き上げられると、ミリアの冷ややかな青い目が目に入ってきた。

「ミリア、どうして」

よく、分からなかった。ミリアのために世界を壊したいと思っていた。俺と同じ程ではなくても、ミリアは今も俺を愛してくれていると思っていたのに。

「あなたは、間違ったことをしたわ」

「何で、ミリア」

ミリアは、小さい頃に見た、俺をあやす優しい母親の顔で、微笑んだ。

「あなたも軍人も、大嫌い」

体が、落ちた。銀色の刃が俺の腹へ突き刺さった。ミリアはナイフを引き抜いて、同じ場所へ突き立てる。もう一度、何度も。

「痛いかしら。痛いでしょう？　ハイン。でも私はもつと痛かったの。痛かったんだから」

ミリアは、声を上げて笑った。薄い青色の目が見開いていた。濡れた肉にナイフが刺さる音が、した。俺は間違っていたのか？　全部今までの報いなのか？　女の、アイネの笑い声が聞こえてきた。「死ぬるということは幸せなのだぞ？　傷を負えば血が出る。けれど体が腐っても、死なない。私はカタリナとは違う。子等よ、一人残らず壊れるがいい」

靴音が聞こえて遠ざかっていく。腹が熱くて、痛い。俺の上で、ミリアがずっと俺の腹を刻んでいる。ミリアは俺の腹にナイフを突き立てたまま、手を止めて、扉の方を振り向いた。

「レオン、どこへ行くの？」

「好きな人を連れ戻しに」

ミリアは、とても穏やかな顔をした。「そう」レオンのことは、許しているのか。俺が仕向けたのだから、当然か。このまま、ミリアに恨まれたままミリアに殺されるなら、それもいいかと思った。ああ、そういえばオルタナは死ねないと言っていたか。ミリアの気がすむまで刺せばいい。ミリアのために体が腐り落ちるのなら、俺はそれでいい。

ミリアは、俺を見下ろした。名前を呼んだが、声が出なかった。

ミリアは俺の腹に刺さったナイフを握ったまま、動かない。薄い青色の目が、俺を見ている。

「本当は、分かっているの」

ミリアの体は、俺の血で真っ赤になっていた。薄い青色の目は穏やかなままだった。

「ハインが私にしたことは、すごく、嫌だった。絶対に、許さない」ミリアは口を開いて、閉じる。迷っているのだろうか。

「でも、ハインは、本当に私とレオンを愛してくれた。あのまま、三人で暮らせたら、よかった」

最後の方は、呟きだった。ミリアはナイフの柄から手を離れた。

「どこで、間違えたんだろう。私はとても、幸せだったのに」

ミリアは俺の胸に額をつけて、体を重ねた。少しの間、何も聞こえなくなった。

「ごめんなさい、ありがとう、私達を守ってくれて。私はお兄ちゃんが好きだったけど、大好きでした」

軍人の手伝いをする時、軍人達に目をつけられないように、せめても俺との関わりが薄まるように、名前で呼ぶよう言ったことを思い出した。

俺は手を動かした。手は震えていた。もう満足に動かせない。ミリアの背に、手を置いた。

「お前も、レオンも、ずっと、愛してる。今も」

かすれた声が出た。ミリアは顔を上げる。薄い青色の目が濡れていた。ミリアは、微笑んだ。それだけでもう、充分だった。俺は生きていく意味を得た。今、ちゃんと笑えているだろうか？ もう何もない。俺は、目を閉じた。

目を開けると、白かった。寝返りを打つと激痛があつて、声が出た。窓の外に雲はなく、薄青い空が広がっていた。

「おはようございます、大佐」

やっと顔だけ振り向くと、林檎とナイフを持ったメイベルが椅子に座っていた。

「やっと面会の許可が下りたので、来ました。記憶飛んでませんか？」

「覚えている」

声はかすれていた。喋ると、痛い。

「夢を、見た」

メイベルは膝の上に置いた皿の上で林檎を切り始めた。

「何の夢ですか？」

「ミリアの夢だ」

林檎にナイフを入れる音が聞こえた。

「恨んでいますか？」

「誰をだ」

「妹さんです」

「愛している。今も」

「そうですね。聞いたこつちが恥ずかしくなりました。忘れて下さい」

メイベルはうさぎ形になった林檎を皿の上に並べていた。

「あれから、どのくらいたった？」

「半年ですかね。大佐が目を覚ましたのが一週間前です。生きてることが奇跡ですよ」

最近、目が覚めたり意識が落ちたりしているのは覚えているのだが、時間の感覚がない。

「リハビリの方が死にそうだと思いますが、頑張ってください。大佐なら、つて、ああ、もう大佐ではなくなるんですね」

メイベルは感慨深そうな顔をした。

「今更だな」

「いえ、まだ正式に除名された訳ではないんですけど、退院しだい除名ということになると思います。まあ、例によってフォレンティア大將が頑張ってるんですけどね」

俺は思わず聞き返していた。メイベルはうさぎ林檎をほおばっている。

「だから、大將があなたが復帰できるよう、かけ合ってるんですよ」  
自然に口が開いていた。

「馬鹿か？」

「大佐、世の中には思っても口に出していいことと悪いことがあるんですよ」

どうして俺のまわりには大將といい、ジルといい、馬鹿な奴が多いのだろう。ああ、そうか。俺は笑っていた。

「俺は、恵まれてるんだな」

「生い立ちからしたら私の方が恵まれてると思いますけど、大佐が

思うならそうなんでしょうね」

「ジークは退院したのか」

「ええ、大佐より大分早く」

「レオンはトゥーシャと一緒にいるのか」

「多分、一緒に過去へ行きました」

「ミリアは、消えたんだな」

「大佐の側で、消えました」

それならいい。世界はまだ続いている。

「というか、その林檎は俺への見舞いじゃないのか」

俺はメイベルの膝の上に乗っている林檎の皿を見る。

「重傷者に食べ物なんて持ってきてませんよ。病院に来ると林檎が食べなくなるから持ってきただけです」

重傷者の病室に林檎を持ちこむこと自体は、いいのか。扉をノックする音に、メイベルが返事をする。扉の隙間から、ベルガ・フォレンティア大将が現れた。思わず体ごと振り向いたら、痛みで声が出た。メイベルは椅子から立ち上がる。

「お疲れ様です。早かったですね」

「軍から近いからな」

大将は軍帽を取った。目が、合った。

「お疲れ様です。一体何をしに？」

「お前の見舞いだ」

「面会許可が下りたら一番に知らせると言われたので  
メイベルが言った。

「わざわざ申し訳ありませんが大将、私は反逆者ですが」

大将はメイベルが座っていた椅子に座った。

「確かにあの場は俺も怒りを覚えたが、考えてみればお前らしい。  
入院中、お前の今までの行動は全てあの時のためだったのだと、やっと納得がいったよ」

「それで、なぜ私を軍へ戻そうと？」

「お前の、願いを叶えようとする力は、本物だった。その強い意志

が、軍には必要だ」

俺は胸にたまっていた息を、吐いた。

「お言葉ですが大将、馬鹿ですか」

「大佐、痴呆症ですか」

メイベルが言った。

「いい、馬鹿は馬鹿と言われなければ気付かない。俺はもう軍人じゃない」

「一応まだ軍人ですよ」

笑い声が響いた。大将が笑っている。

「マグダラス、馬鹿なのはお前を軍に入れた時から重々承知だ。俺は、お前に初めて会った時、お前の目の強さに、願いを叶えてやりたいと思った。お前を本当の息子のように感じていたのだ。親が親馬鹿になるのは当然だろう。軍に戻れ、マグダラス大佐。お前が必要だ」

どうして馬鹿は、最後まで馬鹿なのだろう。ジルも、そうだった。俺は笑った。

「本当に、馬鹿ですね。軍には戻りません。俺の願いは叶いました」

「俺の右腕になれと言っても駄目か」

「嫌ですよ。フォレンティア大将、あなたがいたから俺はここまで来れた。本当に、感謝しています。大将は大将の信じる道を進んで下さい」

大将は俺を見ていた。やがて大きく息を吐き出した。

「意志は固いようだ。分かった。最後に無駄と分かって言うが、メイベルと結婚したらどうだ」

俺とメイベルの聞き返す声が、重なった。

「いくら大将でも、言いつけますよ。元帥に」

メイベルの声が低い。本気のような。

「結婚するか？」

俺はメイベルを仰ぎ見る。紫の瞳は細かった。いつもなら笑顔で怒るのだが、珍しい。



「嫌ですよ。私は安定した人と結婚して、のんびんだらりと暮らしたいんです。大佐なんかと結婚した日には毎日がサスペンスじゃないですか」

「なら安定した職に就くでしょう。そうだな、例えば神官とか」

「大佐がいる教会には絶対行きたくないですね」

俺は笑った。

「冗談だ。お前のことは好きだが、それ以上にパートナーとして好きだ。仕事場が変わっても、俺の下についてくれないか」

「それは私に軍をやめろって言うてますか？」

「なら結婚すれば全て丸く収まるだろう」

「大將は黙っていて下さい」

俺は吹き出した。腹が痛んだ。

「何がおかしいんですか」

俺は首を振る。

「いや、俺は本当に、恵まれている」

メイベルは腕を組んで、息を吐いた。

「大佐が言うのなら、そうなんでしょうね」

俺は頷いた。俺は今、この世界が、とても愛おしい。

## 2（後書き）

あとがき

はい、おはようございます。あとがきです。いつか書くと言っていた兄の過去話をとうとう書いてしまいました。楽しかったです。私から兄への愛が溢れています。偏愛ですね。

今回、場面の要所要所にサブタイトルがついています。私の中で最初とかは「切れる十七歳」ですね。何でそんなに切れてるのかと思いつつ書きました。若かったんですね。人は歳をとると丸くなる兄、意外と冷たい人のようですが、みんなが大好きなんですよー！仲良くなつた人には人情深かつたですね。

そんな兄の親友になつたジルさんですが、最初から死ぬことが決まっていました。ごめんなさい。（後に、あれだけ騒がしい人が未来に出てないから、死ぬと思ったと言われました。ばれてる。2010/7/4追記）裏切るかは決めてなかったんですが、やっぱり裏切りました。どうも裏切りが好きらしい。苗字のサイファリスはサクリファイスのアナグラムなんですよ……！この時点で既に兄の犠牲に！

後は相方のメイベル。二人はくつつかないんですよ！あの、くつつかないけど信賴してるという関係が好きらしいです。

そういえば今回、奇跡が起こったのですが、兄がミリアに名前を呼ばせてた理由、あれ、書いて私も初めて知りました。よく話を作る人は、キャラクターが勝手に動いてるところを外側から見て書いてるだけと言いますが、まさにそれだ！だからレオンはミリアのことは「お姉ちゃん」で、兄のことは「ハイン」だったのかと一人納得してました。奇跡は起こるものですね……！自分の頭の中か

ら出てきてるのに不思議です。やっぱりどこかで独立してるんじゃないか。

そんなこんなで最後はみんな幸せになりました。幸せなんですよ！ 兄が今後何の職につくかは神のみぞ知る。本当、何になるんでしょうね。機会があればレオンとの後日談とか書きたいと思ったのですが、レオンいませんでしたね。過去に行っちゃって。

終わりに。世界は意外と捨てたもんじゃない。

2009/11/2 くらい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7412x/>

---

ラヴィング-マグダラ-

2011年10月23日13時14分発行